

里の今昔

永井荷風

青空文庫

昭和二年の冬、酉とりの市いちへ行つた時、山谷堀さんやぼりは既に埋められ、日本堤にほんづつみは丁度取崩しの工事中であつた。堤から下りて大音寺だいおんじま前まえの方へ行く曲輪外くるわそとの道もまた取広げられていたが、一面に石塊いしころが敷いてあつて歩くことができなかつた。吉原を通りぬけて鷲おとりじんじゃ神社じんじやの境内けいだいに出ると、鳥居前の新道路は既に完成して、平日は三輪行みのわゆきの電車や乗合自動車の往復する事をも、わたくしはその日初めて聞き知つたのである。

吉原の遊里は今年昭和甲こうじゆつ戌いぬの秋、公娼こうしょうはいし廃止の令の出づるを待たず、既に数年前、早く滅亡していたようなものである。その旧習とその情趣とを失えば、この古き名所はあつてもないの

と同じである。

江戸のむかし、吉原の曲輪くるわがその全盛の面影を留めたのは山さん東京とうきょう伝でんの著作と浮世絵とであった。明治時代の吉原とその附近の町との情景は、一いち葉よう女史の『たけくらべ』、広津柳浪ひろつりゆうろうの『今戸心中』、泉鏡花いづみきよかの『註文帳』の如き小説に、滅び行く最後の面影を残した。

わたくしが弱冠じやつかんの頃、初めて吉原の遊里を見に行ったのは明治三十年の春であった。『たけくらべ』が『文芸倶楽部』クラブ第二卷第四号に、『今戸心中』が同じく第二卷の第八号に掲載せられたその翌年である。

当時遊里の周囲は、浅草公園に向う南側千束町三丁目を除いせんぞくまち

て、その他の三方にはむかしのままの水田みずだや竹藪や古池などが残っていたので、わたくしは二番目狂言の舞台で見馴れた書割かきわり、または「はや悲し吉原いで、麦ばたけ。」とか、「吉原へ矢先そろへて案山子かかしかな。」などという江戸座の発句ほっくを、そのままの実景として眺めることができたのである。

浄瑠璃と草双紙くさごうしとに最初の文学的熱情を誘い出されたわれわれには、曲輪外のさびしい町と田圃たんぼの景色とが、いかに豊富なる魅力を示したであろう。

その頃、見返柳みかえりやなぎの立っていた大門外おおもんの堤たたずに佇立たたずんで、東かたの方を見渡すと、地方じかたいまどまち今戸町いこづかの低い人家の屋根を越して、田圃ののかなたに小塚こづか原ばらの女郎屋の裏手が見え、堤の直ぐ下には屠牛

場や元結もとゆいの製造場などがあつて、山谷堀へつづくひとすじ一条の溝渠が横わつていた。毒だみの花や、赤のままの花の咲いていた岸には、猫柳のような灌木が繁つていて、髪洗橋かみあらいばしなどいう腐つた木の橋が幾筋もかかつていた。

見返柳を後にして堤の上を半町ばかり行くと、左手へ降るおり細い道があつた。これが竜泉寺町りゆうせんじまちの通で、『たけくらべ』第一回の書初めに見る叙景の文は即ちこの処であつた。道の片側は鉄漿溝ろじがふに沿うて、廓くるわもの者の住んでゐる汚い長屋の立ちつづいた間から、江戸町一丁目と揚屋町あげやまちとの非常門を望み、また女郎屋の裏木戸ごとに引上げられた幾筋のはねばし橋が見えた。道は少し北へ曲つて、長屋の間を行くこと半町ばかりにして火の見梯子ひみばしごこの立

つている四辻に出る。このあたりを大音寺前と称とえたのは、四辻の西にしみなみ南の角に大音寺という浄土宗の寺があつたからである。辻を北に取れば竜泉寺の門前を過ぎて千束稲荷の方へ抜け、また真直に西の方へ行けば、三島神社みしまじんじやの石垣について阪本通さかもとどおりへ出るので、毎夜吉原通いの人力車じんりきしやがこの道を引きもきらず、提ち灯ようちんを振りながら走り過るのを、『たけくらべ』の作者は「十分間に七十五輛」と数えたのであつた。

長屋は追々まばらになつて、道もややひろく、その両側を流れる溝どぶの水に石橋をわたし、生茂る竹むらをそのままの垣にした閑雅な門構まへの家がつづき出す。わたくしはかつてそれらの中の一ひとか構まへが、有名な料理屋田川屋の跡だとかいうはなしを聞いたこと

があつた。『たけくらべ』に描かれている竜華寺りゆうわじという寺。またおしやまな娘美登里みどりの住んでいた大黒屋の寮なども大方このあたりのすたれた寺や、風雅な潜門くぐりもんの家を、そのまま資料にしたものであると、通るごとにわたくしは門の内をのぞかずにはいられなかつた。江戸時代に楓もみじの名所といわれた正燈寺しょうとうじもまた大音寺前にあつたが、庭内の楓樹は久しき以前、既に枯れつくして、わたくしが散歩した頃には、門内の一樹がわずかに昔の名残を留めているに過ぎなかつた。

大音寺は昭和の今日でも、お酉とりさま様の鳥居と筋向いになつて、もとの処に仮普請かりぶしんの堂を留めてとどいるが、しかし周囲の光景があまりに甚しく變つてしまつたので、これを尋ねて見ても、同じ場

処ではないような気がするほどである。明治三十年頃、わたくしが『たけくらべ』や『今戸心中』をよんで歩き廻った時分のことを思い返すと、大音寺の門は現在電車通りに石の柱の立っている処ではなくして、別の処にあつてその向きもまたちがつていたようである。現在の門は東向きであるが、昔は北に向い、道端からはずつと奥深い処にあつたように思われるが、しかしこの記憶も今は甚だおぼろである。その頃お酉様の鳥居前へ出るには、大音寺前の辻を南に曲つて行つたような気がする。辻を曲ると、道の片側には小家のつづいた屋根のうしろに吉原の病院が見え、片側は見渡すかぎり水田のつづいた彼方かなたに太郎稲荷の森が見えた。吉原田圃はこの処をいったのである。裏田圃とも、また浅草田圃と

もいった。単に反歩たんぽともいったようである。

吉原田圃の全景を眺めるには廓かくないき内京町一、二丁目の西側、

お齒黒溝はぐろどぶに接した娼しょうろう楼の裏窓が最もその処ところを得ていた。こ

の眺望は幸にして『今戸心中』の篇中に委くわしく描き出されている。

即ち次の如くである。

しのぶおか 忍ヶ岡と太郎稲荷の森の梢には朝陽あさひが際立あつて映あつて

いりや 入谷はなお半分靄もやに包まれ、吉原田圃よしわらたんぼは一面の霜である。

ひとむれ 空には一群ひとむれ一群の小鳥が輪を作つつて南の方へ飛んで行き、

からすさわ 上野の森には鳥が噪さわぎ始めた。大鷲おおとり神社の傍そばの田圃の白

鷲が、一羽起ち二羽起ち三羽立つと、明日の酉の市の売場うりばに

新らしく掛けた小屋から二、三個にんの人が見あらわれた。鉄漿溝おはぐろどぶ

は泡立ツたまま凍ツて、大音寺前の温泉の烟は風に狂いながら流れている。一声の汽笛が高く長く尻を引いて動き出した上野の一番汽車は、見る見る中に岡の裾うちを繞めぐツて、根岸ねぎしに入ツたかと思うと、天王寺の森にその煙も見えなくなツた。

この文を読んで、現在はセメントの新道路が松竹座の前から三ノ輪わに達し、また東西には二筋の大道路が隅田川の岸から上野谷中の方面に走っているさまを目撃すると、かつて三十年前に白鷺の飛んでいたところだとは思われない。わたくしがこの文についてここに註釈を試みたくなつたのも、滄桑そうそうの感に堪えない余りである。

「忍ヶ岡しのぶおか」は上野谷中の高台である。「太郎稲荷やなが」はむかし柳

河藩主立花氏の下屋敷しもやしきにあつて、文化のころから流行はやりはじめた。屋敷の取払われた後、社殿とその周囲の森とが浅草光あさくさこうげ月町つちように残つていたが、わたくしが初めて尋ねて見た頃には、その社殿さえわずかに形かたばかりの小祠になつていた。「大音寺前の温泉」とは普通の風呂屋ではなく、料理屋を兼ねた旅館ではないかと思われる。その名前や何かはこれを詳つまびらかにしない。当時入谷には「松源まつげん」、根岸に「塩原しおばら」、根津ねづに「紫明館しめいかん」、向島に「植半うえはん」、秋葉に「有馬温泉」などという温泉宿があつて、芸妓げいぎをつれて泊りに行くものも尠すくなくなかつた。

『今戸心中』はその発表せられたころ、世の噂によると、京町二丁目の中米楼なかごめろうにあつた情死を材料にしたものだという。しかし

中米楼は重おもに茶屋受の客を迎えていたのに、『今戸心中』の叙事には引手茶屋のことが見えていない。その頃裏田圃が見えて、そして刎はねばし橋のあつた娼家で、中米楼についてやや格式のあつたものは、わたくしの記憶する所では京二の松大黒と、京一の稲いなべ弁んとの二軒だけで、その他は皆小格子こごうしであつた。

『今戸心中』が明治文壇の傑作として永く記憶せられているのは、篇中の人物の性格と情緒とが余す所なく精細に叙述せられているのみならず、また妓楼全体の生活が渾こんぜん然ぜんとして一幅の風俗画をなしているからである。篇中の事件は酉とりの市いちの前後から説き起されて、年末の煤すす払はらいに終つている。吉原の風俗と共に情死の事を説くには最も適切な時節を拵えらんだところに作者の用意と苦心と

が窺われる。わたくしはここに最終の一節を摘録しよう。

小万こまんは涙ながら写真と遺書かきおきとを持つたまま、同じ二階の吉よしぎと

里へやの室へ走ッて行ッて見ると、素もとより吉里のおろうはずが

なく、お熊くまを始め書記かきやくの男と他ほかに二人ばかり騒いでいた。

小万こまんは上かみの間まに行ッて窓から覗いたが、太郎たろう稲荷いなぎ、入谷いりや、金かね

杉すぎあたりの人家の燈ともしび火ひが散見ちらつき、遠く上野の電気燈でんきとうが鬼ひ

火ひのように見えているばかりである。

次の日ひるごろの午時頃、浅草警察署の手で、今戸の橋場寄りの或露ろ

地じの中に、吉里が着て行ッたお熊くまの半天はんてんが脱捨ぬぎすててあり、

同じ露地の隅田川の岸には娼妓じよろうの用いる上草履うわぞうりと男物の

麻裏草履あしむすとが脱捨ぬぎすててあつた事が知れた。(略)お熊くまは泣なくな

くみのわ
々箕輪の無縁寺に葬むり、小万はお梅を遣ッては、七日七日
の香華を手向けさせた。

箕輪の無縁寺は日本堤の尽きようとする処から、右手に降りて、
畠道を行く事一、二町の処にあつた浄閑寺をいうのである。明
治三十一、二年の頃、わたくしが掃墓に赴いた時には、堂宇は朽
廃し墓地も荒れ果てていた。この寺はむかしから遊女の病死した
もの、または情死して引取手のないものを葬る処で、安政二年の
震災に死した遊女の供養塔が目立つばかり。その他の石は皆
小さく蔦かつらに蔽われていた。その頃年少のわたくしがこの寺
の所在を知つたのは宮戸座の役者たちが新比翼塚なるものに香
華を手向けた話をきいた事からであつた。新比翼塚は明治十二、

三年のころ品川楼で情死をした遊女盛糸せいしと内務省の小吏谷豊栄に二人にんの追善に建てられたのである。ちなみ（因いんにいう。竜泉寺りゅうせんじ町の大音寺もまた遊女の骨を埋めた処で、むかし蜀山人が碑の全文を里言葉でつくった遊女なにかしの墓のある事を故老から聞き伝えて、わたくしは両三度これを尋ねたが遂に尋ね得なかつた事がある。）

日本堤を行き尽して浄閑寺に至るあたりの風景は、三、四十年後の今日、これを追想すると、恍こうとして前世を悟る思いがある。堤の上は大門近くとはちがって、小屋掛けの飲食店もなく、車夫もいず、人通りもなく、榎えのか何かの大木が立っていて、その幹の間から、堤の下に竹垣めぐらを囲めぐらし池うがを穿うがつた閑雅な住宅の庭が見下された。左右ともに水田のつづいた彼方かなたには鉄道線路の高い土手が

眼界を遮さえぎっていた。そして遙か東の方に小塚こづかツ原ばらの大きな石地いしじぞ蔵くらの後向きになった背が望まれたのである。わたくしはもし當時の遊記や日誌を失わずに持っていたならば、読者の倦うむをも顧かえりみずこれを採録せずにはいなかっただであらう。

わたくしは遊廓をめぐる附近の町の光景を説いて、今余すところは南側の浅草の方面ばかりとなった。吉原から浅草に至る通路の重なるものは二筋あった。その一筋は大門を出て堤を右手に行くこと二、三町、むかしは土手の平松ひらまつとかいった料理屋の跡を、そのままの牛肉屋常磐ときわの門前から斜に堤を下り、やがて真直まつすぐに浅草公園の十二階下に出る千束町せんぞくまち二、三丁目の通りである。他の一筋は堤の尽きるところ、道哲どうてつの寺のあるあたりから田町たまちへ

下りて馬道うまみちへつづく大通である。電車のないその時分、廓くるわへ通

う人の最も繁く往復したのは、千束町二、三丁目の道であつた。

この道は、堤おりを下ると左側には曲輪くるわの側面、また非常門の見え

たりする横町が幾筋もあつて、車夫や廓くるわもの者などの住んでいた

長屋のつづいていた光景は、『たけくらべ』に描かれた大音寺だいおんじま

前えの通りと変りがない。やがて小流れに石の橋がかかつていて、

片側に交番、片側に平野という料理屋があつた。それから公園に

近くなるにつれて商店や飲食店が次第に増にぎやかえて、賑にぎやかな町になるの

であつた。

震災の時まで、いちかわえんのすけ市川猿之助君が多年住んでいた家はこの通の

西側にあつた。とり酉いちの市の晩には夜通し家を明け放ちにして通りが

かりの来客に酒さけ肴さかなを出すのを吉例としていたそうである。明治三十年頃には庭の裏手は一面の田圃であつたという話を聞いたことがあつた。さればそれより以前には、浅草から吉原へ行く道は馬道の他ほかは、皆田間でんかんの畦道あぜみちであつた事が、地図を見るに及ばずして推察せられる。

『たけくらべ』や『今戸心中』のつくられた頃、東京の町にはまだ市区改正の工事も起らず、従つて電車もなく、また電話もなかつたらしい。『今戸心中』をよんでも娼妓が電話を使用するところが見えない。東京の町々はその場処場処によつて、各固有おのおのの面目を失わずにいた。例えば永代橋辺と両国辺とは、土地の商業をはじめ万事が同じではなかつたように、吉原の遊里もまたどうや

らこうやら伝来の風習と格式とを持續して行く事ができたのである。

泉鏡花の小説『註文帳』が雑誌『新小説』に出たのは明治三十四年で、一葉柳浪二家の作におけること五、六年である。二六新報の計画した娼妓自由廃業の運動はこの時既に世人の話柄となつていたが、遊里の風俗はなお依然として変る所のなかつた事は、『註文帳』の中に現れ来る人物や事件によつても窺い知ることが出来る。

『註文帳』は廓外の寮に住んでいる娼家の娘が剃刀かみそりの崇たたりでその恋人を刺す話を述べたもので、お齒黒溝はぐるどぶに沿うた陰鬱な路地裏の光景と、ここに棲息して娼妓の日用品を作つたり取扱つたりし

て暮しを立てている人たちの生活が描かれている。研屋とぎやの店先とその親爺との描写はこの作者にして初めてな為し得べき名文である。わたくしは『今戸心中』がその時節を年の暮に取り、『たけくらべ』が残暑の秋を時節にして、おのおの各その創作に特別の風趣を添えているのと同じく、『註文帳』の作者が篇中その事件を述ぶるに當つて雪の夜を扱んだことを最も巧妙なる手段だと思つている。一いちりゅうさいひろしげ

立齋ちりゅうさい広重の板画について、雪に埋れた日本堤や大門外の風景をよろこぶ鑑賞家は、鏡花子の筆致のこれに匹ひつじよ如たることを認めるであらう。

鉄道馬車が廃せられて電車に替えられたのは、たしか明治三十六年である。世態人情の変化は漸く急激となったが、しかし吉原

の別天地はなお旧習を保持するだけの余裕があつたものと見え、毎夜の張見世はりみせはなお廃止せられず、時節が来れば桜や仁和賀にわかの催しもまたつづけられていた。

わたくしはこの年から五、六年、はか 図らずも きりよ 旅の人となつたが、明治四十一年の秋、重ねて来り見るに及んで、うた 転た前度の げんご 劉 りゅうろ 郎 う たる思いをなさねばならなかつた。仲の町なかちようにはビーヤホール

が出来て、「秋信あきす先通ますず両行の燈影」というような町の眺めの調和が破られ、張店はりみせがなくなつて五丁町ごちようまちは薄暗く、土手に人力

車の数の少くなつた事が際立つて目についた。明治四十三年八月の水害と、あくるとし 翌年 四月の大火とは遊里とその周囲の町の光景とを變じて、次第に今日の如き特徴なき陋巷ろうこうに化せしむる階梯かいてい

をつくつた。世の文学雑誌を見るも遊里を描いた小説にして、当年の傑作に匹^{ひつちゆう}疇^{しゆう}すべきものは全くその跡を断つに至つた。

遊里の光景と風俗とは、明治四十二、三年以後にあつては最早やその時代の作家をして創作の感興を催さしむるには適しなくなつたのである。何が故に然りというや。わたくしは一葉柳浪鏡花等の作中に現れ来る^{きた}人物の境遇と情緒とは、江戸浄瑠璃中のものに彷彿^{ほうふつ}としてゐる事を言わねばならない。そしてまた、それらの人物は作家の趣味から作り出されたものでなく、皆實在のものをモデルにしていた事も一言して置かねばならない。ここにおいてわたくしは三、四十年以前の東京にあつては、作者の情緒と現実の生活との間に今日では想像のできない美妙なる調和があつた。

この調和が即ちかくの如き諸篇を成さしめた所以ゆえんである事を感じるのである。

明治三十年代の吉原には江戸浄瑠璃に見るが如き叙事詩的の一面がなお實在していた。『今戸心中』、『たけくらべ』、『註文帳』の如き諸作はこの叙事詩的の一面を捉え来つて描写の功を成したのである。『たけくらべ』第十回の一節はわたくしの所感を証明するに足りるであらう。

春は桜の賑にぎひよりかけて、なき玉たまぎく菊きくが燈籠とうろうの頃、つづいて秋しんの新に仁に和わか賀かには十分間に車の飛ぶことこの通りのみにて七十五り輛りょうと数へしも、二の替りさへいつしか過ぎて、赤蜻蛉あかとんぼ田圃りやうに乱るれば、横堀うずらに鶉うずらなく頃ちかづも近きぬ。朝夕の秋風身に

しみわたりて、じようせい上清が店の蚊遣香かやりこう懐炉灰かいろばいに座をゆづ
 り、石橋の田村やが粉挽く臼の音さびしく、角海老かどえびが時計の
 響きもそぞろ哀れの音ねを伝へるやうになれば、四季絶間なき
につぼり日暮里の火の光りもあれが人を焼く烟けぶりかとうら悲しく、茶屋
 が裏ゆく土手下の細道に落ちかかるやうな三味の音を仰いで
 聞けば、なかのちよう仲之町芸者が冴さえたる腕に、君が情の仮寐の床に
 と何ならぬ一ふしあはれも深く、この時節より通そひ初はむるは
 浮かれ浮かるる遊ゆうかく客ならで、身にしみじみと実じつのあるお方
 のよし、遊女つとめあがりのさる人が申しき。

一葉が文の情調は柳浪の作中について見るも更に異なる所がない。
 二家の作は全くその形式を異にしているのであるが、その情調の

叙事詩的なることは同一である。『今戸心中』第一回の数行を見よ。

太そら空は一片の雲も宿とどめないが黒味わたつて、廿四日の月は未
 だ上のぼらず、霊あるが如き星のきらめきは、仰まげば身も冽しまるほ
 どである。不夜城を誇ほこりがお顔のきの電気燈は、軒のきより下の物の影
 を往来へ投げておれど、霜しもがれみつ枯つき二三月の淋まぬかしさは免かれず、大門
 から水道尻まで、茶屋の二階に甲かんばし走しつた声のさざめきも聞
 えぬ。

明後日が初西の十一月八日、今年はやや温あたたか暖かく小袖を三枚みつ
 重かさね襲ねるほどにもないが、夜が深ふかけてはさすがに初冬の寒さむ気が
 感じられる。

いまのさきう
少時前報ツたのは、角海老の大時計の十二時である。京町
には素見客の影も跡を絶ち、角町には夜を警めの鉄棒

の音も聞える。里の市が流して行く笛の音が長く尻を引いて、
張店にもやや雑談の途断れる時分となツた。

廊下には上草履の音がさびれ、台の物の遺骸を今室の外へ
出している所もある。遙かの三階からは甲走ツた声で、喜助

どん喜助どんと床番を呼んでいる。

遊里の光景とその生活とには、浄瑠璃を聴くに異らぬ一種の哀
調が漲っていた。この哀調は、小説家がその趣味から作り出した
技巧の結果ではなかった。独り遊里のみには限らない。この哀調
は過去の東京にあつては繁華な下町にも、静な山の手の町にも、

折に触れ時につれて、切々として人の官覚を動す力があつた。しかし歲月の過るすくに従い、繁激なる近世的都市の騒音と燈光とは全くこの哀調を滅してしまつたのである。生活の音調が變化したのである。わたくしは三十年前の東京には江戸時代の生活の音調と同じきものが残つていた。そして、その最後の余韻が吉原の遊里において殊に著しく聴取せられた事をここに語ればよいのである。遊里の存亡と公娼の興廢の如きはこれを論ずるに及ばない。ギリシヤ古典の芸術を尊むがために、誰か今日、時代の復古を夢見るものがある。

甲こうじゆつ 戌 十二月記

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年5月28日作成

2011年4月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

里の今昔

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>